

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463652

研究課題名(和文)セクシュアリティの健やかな発達を促す教育プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of an education program to promote the healthy growth of sexuality

研究代表者

西頭 知子(nishito, TOMOKO)

大阪医科大学・看護学部・講師

研究者番号：90445049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：思春期の子どもと親のためのセクシュアリティ教育プログラム開発のための指標を得ることを目的とした思春期の子どもと母親へのインタビュー調査を実施した。結果からは、思春期の不安定な子どもの育児において母親自身も不安定になっている現状、性について子どもと話したいと思う一方で子どもからの質問に対して戸惑う姿、子どもの恋愛に関心を持ち、人と親密な関係を築けるようになってほしいと願っていること等が示された。この結果をもとに、ガイド作成に着手しており、今後も引き続き、教育プログラムの考案に向けて研究を継続していくものである。

研究成果の概要(英文)：Interviews were conducted with mothers of adolescent children to identify indices to develop a sexuality education program targeted at adolescents and their parents. The interviews revealed that mothers felt insecure in their parenting of their equally insecure adolescent children, that mothers want to discuss sexuality with their children but are at a loss as to how to answer their children's questions, that mothers are interested in their children's love lives and hope that their children will build intimate relationships with people, among other revelations. Based on these results, work is underway to create a guide and further research is planned moving forward to devise an education program.

研究分野：母性看護学

キーワード：セクシュアリティ教育 思春期 思春期の子育て

1. 研究開始当初の背景

計画当初には、次の(1)～(3)に述べるとような学術的背景があった。

(1) 避妊や性感染症予防の知識を持たない若年層の性行動の問題

先行研究からは大学生の6～7割が性交を経験していること、高校生の8～9割はお互いの合意や避妊、性感染症の予防等の条件のもと性行動を容認していることが示されていた。しかし、正しい避妊行動はとれておらず、性感染症についても他人事だという意識を持っている等、性行為に対するハードルが低く、避妊・性感染症に関する認識が乏しい現状が窺えた。また、親による子どもの虐待や20代女性の子宮頸がん罹患者の増加等の問題においても、若年者のリスクの高い性行動との関連が指摘されていた。

(2) 義務教育において十分な性教育が実施されていない実情

先行研究からは中学校で実施されている性教育の平均時間数は3年間で9.19時間と少なく、生徒の性知識調査においても平均正答率が男女とも4割に満たないこと、性教育の具体化は各学校の自由裁量であるため、まったく取り上げていない学校も出てしまうこと等が明らかにされていた。また、研究者が行った調査においても中学校の性教育が組織的に計画されておらず担当教師の裁量に任されていること、教師の半数以上が現行の性教育を十分なものでないと考えていることが明らかになった。

(3) 性行動に関する意思決定における男性優位性と性行動に伴うリスク対処への意識の低さ

文献検討から、日本の若者の性行動の場面における特徴として、女子は受け身で意思決定をしていないこと、男子は性行動に伴うリスク対処の意識が低いこと、知識をもっているにもかかわらず行動につなげていないこと等が明らかになった。

以上のような背景から、当初の計画では若年者の性行動の活発化を主な課題として捉えていた。

しかし、その後、以下のような調査報告等を受け、背景の変化を捉えることとなった。

(4) 青少年の性行動の特徴の二極化

「第7回青少年の性行動全国調査報告」(2013)では、青少年の性行動に活発な層と不活発な層に分極化する現象が起きていることが示され、不活発な層においては、性に対して無関心、無気力であることが指摘された。

(5) 性的少数者に対する社会的関心の高まり

2013年に文科省による「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」が実施されたこと等、LGBTに代表されるような性的少数者に対する社会的関心が高まると共に、思春期の子どもたちのセクシュアリティに関わる様々な問題が明らかになり、そのような問題を抱える子どもへの親たちへの対応の必要性も指摘されるようになった。

このような状況を鑑み、当初計画より広い概念でセクシュアリティ教育を捉え直す必要性があると考え、研究枠組みの再構築を行った。

性の保健行動については、知識と行動は一致しないことが指摘されており、「理解すること」が「行動変容する」ことを必ずしも意味しないことが明らかにされている。また、性の保健行動は相手のある行動であるため、自分だけの意思で実行できるとは限らず、意識や態度、価値観、関係性がからんできると指摘されている。さらに、思春期の子どもたちの性に関する健全化を図ること、LGBTに代表されるような子どもたちが抱える性の多様性について当事者や周囲の理解を深めることが求められる。

これらのことを踏まえて、性教育は、知識の習得のための教育ではなく、セクシュアリティに対する態度や価値観、責任ある性行動をとれるためのスキル等、包括的に捉えたセクシュアリティ教育であることが必要である。

また、セクシュアリティ教育には、周囲の大人の理解も重要である。母親から情緒的支援を受けている子どもほど安定的な愛着形成パターンをもっていること、父母が受容的関わりを子どもに行うほど子どもの内的統制が固まること等が先行研究からも示されており、親の支援は思春期の子どもの心理社会的特性を高めることが予測される。

その一方で思春期の子どもたちの心身の発達上の変容とそれに伴う混乱は、親にも様々な影響を与えており、子育てに対してストレスや困難感を感じ、相談を必要とする親も多い。社会的ネットワークからサポートを受けている親ほど子どもに対する情緒的支援を行っているとの報告もあり、子育て支援を思春期・青年期まで継続して行うことが求められる。しかしながら、我が国における子育て支援は、乳幼児を育てる母親に焦点が当てられ、思春期の子育て支援は十分にされていない現状がある。

2. 研究の目的

本研究は、子どもたちが責任ある性行動がとれることを目指したセクシュアリティ教育プログラムを開発し、実践、評価することを当初目的としていた。しかし、準備段階で発表された調査報告や子どもたちのセクシュアリティの問題に対する社会的関心の高まり等の変化により、2度の計画修正を行ったこ

と、計画の修正に伴いセクシュアリティ教育プログラムの対象を子どもとその親まで拡大したこと、内容をより包括的に捉え直したこと等から、計画に大幅な遅れが生じる結果となり、当初に目指した教育プログラムの開発まで至らなかった。

当初に目指した教育プログラムの開発のための調査として、思春期の子どもをもつ親が感じている子育てに対する困難感や不安を明らかにすることを目的とした調査を実施した。

3. 研究の方法

『思春期の子どもをもつ母親が感じている子育てにたいする困難さについての調査』

養育者である母親が思春期の子どもの子育てに対して感じている戸惑いや困難さを明らかにすることを目的として行った。対象は、健常児である思春期の子どもと同居し、子育てをしている成人の母親 9 名であった。また、子どもの年齢は、教育プログラムの対象として想定している 10～15 歳とした。

選定基準に合致する人を他者からの紹介等を通して便宜的にサンプリングした。また、子どもの性別により、調査結果に差異が生じることが考えられたことから、子どもの性別が偏らないよう選定を行った。

調査方法は、インタビューガイドに沿った半構成的面接とし、1 人の対象者に対して 60 分程度の面接を 1 回行った。インタビューガイドの概要は、基本的属性、最近感じる子どもの変化、子どもの変化に関連して感じる困難や戸惑いの有無、メディアからの情報やソーシャルネットワーク、身近な人から子どもが受ける影響に対する戸惑いの有無とその内容、その他、子育て全般における困難、であった。得られた言語データは、質問に対する回答部分について、その意味内容を質的記述的に分析し、母親が感じている子育てに対する困難さや戸惑いの要素を抽出した。

4. 研究成果

『思春期の子どもをもつ母親が感じている子育てに対する困難さについての調査』

調査の結果母親たちは、子どもたちが親に反抗的な態度をとり親から離れたがる一方で、スキンシップを取りたがり甘えてくることもあること、また、体重や体型を気にしたり、親から身体の変化を指摘されると怒るなど自分の容姿への関心が芽生えてきたことを感じる反面、異性の親との入浴や家族に裸を見られることに抵抗がないなど、相反する側面を持っていると感じていた。そのような子どもの態度に、母親は不思議な感じを持ち、反抗したり甘えたりする子どもと自分との関係性をちぐはぐに感じ、母親自身も子どもに対して一貫した態度がとれず不安定になっている現状が示された。

また、母親たちは、子どもたちが性に関し

てどのような知識を持っているのか、学校で受けている性教育について把握できていないことに不安を持っていた。母親たちは、女性のからだについて積極的に伝えることを心がけ、性について聞かれたらごまかさずに伝えるようにしながら、家庭で性について話をするための突破口を探っている状態であった。家庭での性教育の必要性を感じながら、どう伝えていけばいいかと悩み、子どもからの性に関する質問に対して戸惑いを感じていた。特に、男子の性的発達に関する対応に戸惑っていることが語られ、父親や学校の教師にその役割を期待していた。また、男子の母親からは、子どもが性犯罪の加害者になることへの不安も語られた。

そして、子どもたちが将来、人と親密な関係を築き、よい恋愛経験を持つことを願っていた。

本調査で得られた結果は、思春期の子どもと親のためのセクシュアリティ教育を検討する指標となるものであり、この結果をもとに、思春期の子どもと親のためのセクシュアリティ教育のためのガイド作成に着手している。

子どもたちのセクシュアリティに関する調査・介入においては、思春期の混乱状態にあり、成長・発達段階に個人差がある子どもたちのセクシュアリティに触れる事に対して、教育現場や保護者から難色を示される等、従来受け入れが比較的困難であった。しかし、文科省による“学校における性同一性障害に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施についての通知”(平成 27 年)が出されたこと等から、セクシュアリティ教育に対する教育現場や社会の関心も高まっていると言える。子育てをする親たちの子どものセクシュアリティに対する関心も高まっていることは、今回の調査結果からも示されており、本テーマにおける社会的ニーズは高いものであると考えられ、今後、調査やプログラムの実施等を行う場合の対象者の受け入れもスムーズに運ぶことが期待できる。

また、子育て支援は母親がその対象として捉えられることが多いが、父親の子育て参加が推進されている現状において、父親も含んだ両方の親を対象とした支援を考えることが重要であり、そのことは、今回の調査からも示唆された。

今後、引き続き、思春期の子どもと親のためのセクシュアリティ教育プログラムの考案に向けて、研究を継続していくものである。

本調査に関しては、昨年度の学会発表の続報として今年度も学会で発表予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

西頭知子、佐々木綾子、佐々木くみ子：思春期の子どもをもつ母親が感じている子育てに対

する困難さについての調査，第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017.12

6．研究組織

(1)研究代表者

西頭 知子 (NISHITO, Tomoko)
大阪医科大学・看護学部・講師
研究者番号：90445049

(2)研究分担者

佐々木 くみ子 (SASAKI, Kumiko)
鳥取大学・医学部・教授
研究者番号：00284919

佐々木 綾子 (SASAKI, Ayako)
大阪医科大学・看護学部・教授
研究者番号：00313742